

氏名（本籍）	アオキ ノブオ 青木 信雄（鹿児島県）
学位の種類	博士（国際文化学）
学位記番号	乙 国第3号
学位授与年月日	平成26年3月19日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項
論文題目	石川達三研究—新資料の発見による再構築—
論文審査委員	主査 野中哲照 教授 副査 森 孝晴 教授 副査 石田忠彦（元鹿児島大学大学院教授）

内容の要旨

本論文「石川達三研究—新資料の発見による再構築—」は、2008年に双文社から公刊された青木信雄氏の著作『石川達三研究』をもとに全面的に改稿・再構成したものである。作家研究を軸としつつ昭和10年以前の近代文学史をも俯瞰する重厚な論文で、収められた各論考が一貫した問題意識のもとに執筆されている。

副題にあるように、本論文の最大の特徴は、新資料の発見にある。掲載された論考のうち7本は、未知の石川作品を青木信雄氏が新たに発掘したものである（『ミカド』から2作品、「山陽新報」から5作品）。それ以外に、先行研究（久保田正文）の誤りを修正した論考が5本もある。

以下、各章ごとに概要を述べる。

序章 本論文の目的および方法

本論文は、これまであまり研究されていなかった石川達三の初期の歩みを明らかにすることを目的としている。とくに第1回芥川賞受賞作である『蒼氓』（昭和10年、石川31歳）に至る道筋を解明する。石川の父、母、継母、杉山栄、賀川豊彦などが石川に与えた影響から説き起こし、横手、高梁、岡山、東京などの生長環境にも目配りしつつ、プロレタリア文学など当時の文壇状況などにも触れながら初期石川像を再構築するという。

方法としては、第1に、これまで知られていなかった新資料の発見があったので、それを軸にしつつ初期石川像を再構築する。第2に、先行研究で目配りのなかったヴァリエント（異本）との比較を重視する。第3に、「革命」と「社会改良」の相違、石川への「社会派」評の実際（さしたる根拠のな

いものであること)、「弾圧」の段階的変化などを解きほぐし、柔軟で丁寧な分析に基づいた初期石川像の再構築を目指す。

これに加えて、当時の社会主義・共産主義運動の動向、「早稲田文学」「新早稲田文学」の質的变化、ゾライズムの日本化などについても、前提的なこととしてこの序章で触れている。

第1章 石川達三の生長環境と中学校時代の文章

——『旅行記 屋島懐古』『短歌 小論』——

石川達三〔明治38年(1905)～昭和60年(1985)〕は、秋田県平鹿郡横手町(現・横手市)に生まれた。父は秋田県立横手中学校の英語科教員であった。父の転勤・転職に伴って秋田市、岡山県上房郡高梁町(現高梁市)、岡山市などに移り住む。父は英語のほか俳句にも通じ、日本の古典の愛好者でもあった。そのような父から石川達三が受けた影響は小さくない。9歳で母を亡くす。母は石川に数多くの東北の民話を語ってくれた。そのことも石川ののちのヒューマンイズム(民への視線)に影響を及ぼしたものと考えられる。翌年父が再婚する。この継母は、敬虔なクリスチャンであった。石川も教会へ行き、一時は洗礼を受ける一歩手前までいったが、踏みとどまった。キリスト教や牧師への疑念が払拭できなかったためである。岡山県立高梁中学校3年までは高梁に住んでいた。そこでの菊楽屋での思い出も、石川のヒューマンイズム形成の多大な影響を与えた。その後、転居に伴い関西中学校4年に編入しそこを卒業した。

今回青木氏が発見した新資料『旅行記 屋島懐古』『短歌 小論』は、関西中学校5年生の時の文章である。いずれも、型にはまった古典的な漢文訓読調の文章で、観念的・類型的な描写がちりばめられており、この段階ではまだリアリスト(よく観察し、調べ、丁寧に描く)の片鱗は窺えない。

第2章 杉山栄との出会いによる〈文人〉石川達三の始動

——『淋しかったイエスの死』『彼の出京』——

杉山栄〔明治25年(1892)～昭和43年(1968)〕は、岡山県立津山出身の社会学者で、早稲田大学を卒業後地元に戻り、大正9年(1920)から山陽新報社に勤めていた。杉山は大正11年～13年、ドイツへ留学し、その帰国後に石川達三と出会った。その頃の石川はすでに上京しており、早稲田大学高等学院に在学していたが、夏休みなどの長期休暇で帰省した際に杉山との出会いがあったものと推測される。石川の実家と杉山の家とが近かったことによる出会いだという。杉山は、早稲田の出身ということもあり、またドイツ帰りということもあり、社会的なまなざしや開明的な考えの持ち主であったと推測される。当時の地方紙は中央紙に掲載された有名作家の原稿を二次的に買い取るのが一般的であったが、杉山は自らの見識によって中央の有名作家の原稿を取り寄せて山陽新報に掲載していた。そのような杉山の影響を受けたらしく、この時期の石川の作品には、かつての『旅行記 屋島懐古』『短歌 小論』にはみられない生き活きた文章や批判精神があふれている。

『淋しかったイエスの死』は、女性にたいするイエスの情欲を描いた作品で、継母の導きによりキリスト教の洗礼を受けようとして思いどまった石川達三の体験と通じている。絶対者(神やイエス)を絶対視することなく、その内部に人間的なものを見出し、絶対者をも相対化する姿勢を示したものである。そこに、杉山栄(早稲田大学の在野精神、社会派、批判精神)の影響が考えられる。

『彼の出京』は、安定しつつも希望のない田舎の生活を捨て、不安定ながらも希望のある東京の生活を選択する主人公を描いている。主人公に社会的なまなざしをもたせ、中央で活動する志をもたせたのは、杉山栄の影響を受けていたことによるものと考えられる。

第3章 早稲田への入学と〈社会派〉石川達三の形成

——『放たれたる犬』——

石川達三は、大正15年/昭和元年(1926)に大阪朝日新聞の懸賞小説に『幸福』(原題は『不幸』)を投稿し、これが入選したことによって二百円の賞金を得た。それを学資として、石川は、昭和2年4月、早稲田大学の英文科に進学した。英文科を選んだのは、英語教師であった父の影響であったろうと考えられている。

早稲田に入学してから、石川が周囲からどんな影響を受けたのかは明らかになってはいない。ただ、かつての自然主義の牙城であった早稲田の存在を考えると(その対極に「三田文学」の慶応や「白樺」の学習院)、社会的な意識を強くもった者が石川の周囲に多く存在していたであろうことは想像に難くない。また、石川が早稲田に入学した昭和2年は、プロレタリア文学が内部分裂を起こしていた時期でもある。周囲にそのような論争がある中で、石川がひとり無関心でいるはずもない。

この時期の石川も、故郷の「山陽新報」に小説を投稿し続けた。『放たれたる犬』は「山陽新報」昭和3年2月27日に発表された作品なので、石川が早稲田に入学してからほぼ一年たとうとしているところに発表された作品である。これも青木氏による新たな発掘作品である。

この作品は、「力」によって勝ち取られた支配も被支配もない、絶対自由な世界を主題としている。人間にとらえられ、一度は安易な生活に甘えようとした一匹の野犬が、〈かつての野生・かつての自由〉を取り戻すべく自らの意志と力で「解放」を勝ち取っていく物語(主人にとびかかり、噛み付く)。自由・解放の主題は、広い意味でプロレタリア文学に近い作品である。しかも、解放するにあたって武力闘争をも肯定していると考えられるふしがある。早稲田に入学して、石川の立場が一時は急進的な社会派に傾斜したとみられる作品で、石川の生涯を通してみると、この作品がもっとも急進的なものであると位置づけられる。後世、石川は「社会派」と評されることが多くなるが、じつはそのような側面がみられるのは早稲田に在籍していたごく一時期のことと考えられる。

第4章 早稲田退学を契機とした石川達三の変化

——『幸福』『小品 春日』『新たなる風景』——

懸賞金を学資として早稲田に入学した石川であったが、学資が続かず結局1年で早稲田を中退することになった。昭和3年3月に早稲田を中退し、同年5月に国民時論社に入社した。

その早稲田中退の直前、昭和3年3月25日発行の「ミカド評論」に発表された4編の文学論がある。「文芸雑論」「芸術の変遷」「階級・芸術・其の他雑感」「人間滅亡論」である。これらは、青木氏による新たな発掘論文である。

そのなかでも、文学論「文芸雑論」は、この時期の石川の思想をよく表している。「現今のプロレタリア文学は面白くないものばかりだ。目的意識が強すぎる。まるで、思想論文を読んでいるようだ」と批判している。一方では、過渡期の作品として多少許容すべきであると擁護する。プロレタリア文学に対する石川達三の微妙な姿勢がうかがえる。

学資不足により早稲田を中退したのだが、心理的にも石川は早稲田から離れはじめていたと考えてよい。石川が早稲田を1年で中退したこと、プロレタリア文学と距離を置き始めた文章を書いていること(石川の急進性が鳴りを潜めたこと)とは軌を一にするとみてよい。

この時期に発表された石川の作品に、『幸福』『小品 春日』『新たなる風景』がある。このうち『幸福』は『幸不幸』の原題で早稲田入学前に執筆したものである。早稲田退学を契機とした石川の変化を窺いうる作品としては、『小品 春日』『新たなる風景』に注目すべきだろう。

『小品 春日』には、子どもの出来ないことを悩む夫婦が登場する。夫は妻に病院に行くことを勧めるが、妻は「病院へ行く位なら離縁された方がいい位よ」という。古い恥の意識をもつ女性として、この妻は形象されている。その妻が、雌の飼い犬が出産したことをきっかけにして、自分も病院に行ってみると言い出す。この作品は、古い因習を打破し乗り越えてゆく人物に焦点を当てている。『放たれたる犬』にみられたような社会性はすでになく、石川にとっての〈束縛〉からの〈解放〉が早くもこの昭和3年の段階で内面的なものに向かい始めていることを窺わせる作品である。

『新たなる風景』も、ある夫婦の物語である。これも昭和3年5月「ミカド評論」に発表されたもので、青木氏による新たな発掘作品である。「彼」を束縛する「妻」を設定。「妻」は「彼」を肉体的にも精神的にも束縛し続けた。その「妻」が死ぬ。「妻」の死は、「自由」や「解放」をもたらすものではなく、「生活に根が無くなる」事を意味していた、とする。〈束縛〉による安住もありうるというのである。本当の意味での〈自由〉〈解放〉とは何かを問いかけた作品である。プロレタリア文学から距離を置き始めた石川の、〈束縛〉からの〈解放〉の意味が社会性を喪失して内面化し始めたことを示す作品と位置づけられる。

第5章 ゾラとの邂逅による石川達三の変化

——『昏瞑』——

ゾラは、明治の末年から日本でもフランス語や英語訳で読まれていたが、大正10年ごろから日本語訳が数多く出版されるようになった。石川自身、のちに『経験的小説論』(昭和45年5月、文芸春秋)においてゾラから影響を受けたことを告白している。その影響を受けた時期についての言及はないが、石川の作品『昏瞑』の内容から見て、昭和3年の後半から昭和4年の前半にかけてのことであろうと推測される。ただし、ヨーロッパにおけるゾライズムが自然科学的な決定論

(ネガでもポジでもなくニュートラル)であったのに対して、それが日本に輸入されると日本的な過去・現在・未来の宿命論(ネガティブなもの)へと傾斜していったと指摘されている。

『昏瞑』は、昭和4年4月から5月にかけて16回にわたって「山陽新報」紙上に連載されたもので、これも青木氏による新発掘の作品である。「生活苦」「障害者修の存在」「夏子の死」等を「昏瞑」ととらえ、そこからの逃避を考えるが、結局はそれを「運命」とみて、あきらめ、「甘受」という作品。どうすることもできない底辺の人間の生活を描いている。その人間描写(障害者修に対する過酷なあつかい)においてゾラの影響がみてとれる。

この考えは、人間が遁れがたい宿命を背負っていると見做すものであるがゆえに、閉塞感や息苦しさを伴うものであったと考えられる。石川がブラジルへの渡航を決断したのは、そこからの脱出を希求したものであった可能性がある。

第6章 石川達三にとってのブラジル渡航の意味

——『若き都サン・パウロの戯歌』——

上述のように昭和3年の後半にゾラの影響を受け(推定)、昭和4年4月に『昏瞑』を発表した石川は、おそらく人間の宿命というものにあえぎ始めたのではないかと考えられる。昭和5年3月に国民時論社を退職し、ブラジルのサン・パウロへの渡航を決断したのは、そのような閉塞感から脱出したかったからではないだろうか。しかし、ブラジルでもあまりいい思いをしたわけではないらしく、わずか半年の移民暮らしを体験しただけで、結婚を理由に日本に戻っている。

『若き都サン・パウロの戯歌』は、石川達三がブラジル、サン・パウロに滞在した昭和5年3月から8月までの5か月間のことを題材にした作品である。「1924年の革命」を「サン・パウロを築く為の重大な革命」と捉えたうえで、「1930年」の「革命」が終わったとき、「革命」に参加した美しい青年は「跛」になっていた。それが原因で失恋する。「革命」によって国の隆盛はあっても、「革命」に参加し、傷ついた兵士は救われない。

この作品の中には、日本への望郷の念を捨てきれない日本人移民の姿、日本を離れても日本人であることは離れられないことを示す白人コンプレックスのエピソードなどを語ったうえで、作品の末尾を、「光」ある未来を感じつつブラジルを離れる(日本に向かう)と結ぶ。すなわち、息苦しさゆえに脱出したはずの日本を肯定的に再評価する方向へ向かう。

第7章 石川達三の転機としての「新早稲田文学」への参加

——『其の白き道を』『射撃する女』『文芸の破壊性に就いて』——

帰国後、国民時論社に戻り、翌昭和6年6月には「新早稲田文学」の同人となっている。この時期に書かれたのが、『其の白き道を』『射撃する女』である。

『其の白き道を』は、石川が「新早稲田文学」の同人になって初めて発表した作品である。妻を失った夫が、「十五年の結婚生活」の意味を振り返るという内容で、夫婦間の認識のずれや価値観の差を描き、子どもと同化することはあり得ても、妻とはそれを望みえないとしている。結婚とは

「私の生命の継承者」(子ども)を得るためのものであって、夫婦はそれ以上には接近しえないのかという結婚への諦観が窺える作品である。家庭を〈束縛〉と捉えていた夫が、その〈束縛〉の意味を考えているという点において、この作品にもやはりゾライズム(日本的)の影響がみられ、また石川の〈束縛〉論、〈解放〉論が社会的なそれだけでなく内面的なものへと向いていることを示すものとみてよい。

『射撃する女』は、なめし革の狩猟服に惹かれる女が主人公である。それを着ていた元夫は、今はもういない。女はなめし革の狩猟服を着た元夫に「魅惑」され、どんなに「嫌はう」「憎まう」と思っても、「反抗しきれない」のだった。その狩猟服に女は「怨み」が「籠つてゐる」という。女は「現在の彼」を冷遇しがちだったが、「現在の彼」がなめし革の狩猟服を着て空気銃を撃つと「性的」な刺激を感じて泣くのであった。

この作品は、なめし革の狩猟服という物質に〈束縛〉される女の心理を描いている。女自身がそのことを忌避しているのに、心底突き放し切れないのである。他の誰でもない自らの心のうちに〈束縛〉されるものがあることを抉り出している。そのことは、社会的な運動として〈束縛〉からの〈解放〉を叫び続ける人々を揶揄しているものともいえる。そのことにのみ翻弄される人間の愚かさを指摘しているだろう。石川の思考が深化していることが窺える。

『文芸の破壊性に就いて』は、石川が「新早稲田文学」同人になって3か月後の論文である。ここには、この当時の石川の文学観があますところなく披歴されている。

「文芸の破壊性」とは「環境に対する否定」をいう。「環境」とは自らの周囲のことである。「環境否定」は「環境への正視から出発」と石川は言う。「現在の環境を否定し」、「明日の環境を肯定し創造」しようとすることを「文芸の建設性」だと石川は主張する。ゆえに、「文芸の破壊性」とは「急進的創造的活動的な文芸傾向を辿る」ことになる。「無産派文芸はその意味で最適の例である」と石川は位置づける。この論文によって石川達三の「無産派文芸」への肯定的な見方があきらかになるとともに、一方で、浪漫派にも建設性があるとする。

石川達三は「文芸の破壊性に就いて」を土台にして、昭和12年9月青野季吉の『「調べた」芸術』の手法によって『日陰の村』を書き、創作上の自信を得ていくことになる。

戦後、石川は「社会派」として評価されてゆくことになるが、じつは「社会派」からも距離を置き、内面化し、浪漫派の建設性をも認めようとしているところにこそ注目すべきである。すなわち、石川を「社会派」と規定するところについても再考されなければならない。

第8章 石川達三における〈解放〉のさらなる内面化

——『非情都市』『戦争と舞踏』『襟を開く女性』『聖愛』

『石婦』『禁断』『秋の日の男たち』——

昭和6年9月、満州事変が勃発した。関東軍の暴走によるものだが、当時はそのことを知る由もなく、軍部を支援する風潮が国民の中にも広がっていった。昭和6年よりも7年、7年よりも8年と、徐々に言論への統制が厳しくなっていったのである。そのように、弾圧により社会運動に限界の

出てくるころ、文壇には、束縛からの〈解放〉の意味を、社会的なそれではなく心の問題として捉え返そうとする動きがますます一般化しつつあった。〈解放〉の内面化である。

昭和6年12月の『非情都市』は権力の〈束縛〉に翻弄される民を描いているという点で、あるいは昭和7年1月の『戦争と舞踏』は国家の論理と個人の心情とのずれを描いているという点で、それぞれ社会的なまなざしを保持していたのだが、これ以降しばらく、石川は社会そのものを小説の題材とはしなくなる。それが、『襟を開く女性』『聖愛』『石婦』『禁断』『秋の日の男たち』である。

『襟を開く女性』は、看護師であった主人公の女性がその仕事を捨て、「一切の束縛に負けない強い自分の心」、すなわち主体性を持って「広く力強い大きな社会」へと歩み出す話である。この女性に恋をする男(患者)がいる。女性にとっては、それも〈束縛〉なのである。もっといえば、自分の思いどおりにならないという意味で、この作品では〈束縛〉を広く捉えている。その際の〈解放〉とは、誰かに救出してもらうことではなく、自ら主体的に意思を貫くものだとする石川のメッセージが窺える。しかしこれも、内面の問題である。

『聖愛』は、「過去の愛情なんか仕様が無い」、「その代りわたし、現在の愛情にはそれは忠実なの」、だから「何度目に恋をしても、自分では何時でも初恋だと思ふ」という女性が主人公。石川達三は「永遠に神聖なる初恋を続けて行く」女性を通して処女崇拜、貞操観念に呻吟する女性たちに、そこからの解放の一つの生き方、考え方を示した。すでに〈解放〉の内面化が始まっている時期の石川作品らしく、過去の思い出さえ〈束縛〉であるとする観念的な〈解放〉論である。

『石婦』は、子どもに恵まれなかった女性の悲しみを描いた作品である。後妻敬子の死後、箆笥の一番底に思いもかけず、産衣一揃いを発見し、子どもに恵まれなかった敬子の悲しみを夫が知る。夫は生前けっして妻を〈束縛〉しないことを良しと考え、子どもを産むことさえ望まなかった。ところが敬子は「その為に却って中心を失って放浪」していたのだ。この作品は、〈束縛〉のないことは「愛」のないことと同義であることを言ったものであり、〈自由〉や〈解放〉の行く先に何があるのか、何のための〈自由〉〈解放〉なのかを問いかけたもの。やはり、石川の思考の深化、内面化が窺える作品である。

『禁断』は、二人の男性と一人の女性の共同生活を描いたもので、結婚を〈束縛〉にとらえ、〈自由〉を獲得するためには恋愛や結婚は有害なものとする考え方を設定し、そこで動く独身男女の心理を描いている。結局、第四の登場人物である女性がこの部屋に転がり込むことによって、恋愛感情で結ばれるひと組のカップルが生まれ、共同生活は崩壊してゆく。〈自由〉を獲得するためにルールを設ける(=恋愛禁止という〈束縛〉を設ける)という矛盾を描き、さらには人間の本性として、恋愛や結婚という〈束縛〉を望んでさえいるとのメッセージを石川は発信している。やはり、石川を「社会派」と評価することは間違っている。

『秋の日の男たち』は、千草という一人の女性をめぐる、「俺」と「岡本」との三角関係の話である。この中では放埒に遊んでいることが〈自由〉なのだとする考え方を男たちに言わせておいて、「妻を娶ると言ふ事は既に不合理である」とする。「岡本」と「千草」が恋仲になったあと、「岡本」は

留置場に入る。「岡本」は「千草」に対して「俺」に頼るようにと彼女を差し出すが、「俺」はその好意を受けず、最終的には「岡本」との「信愛」をとる。〈束縛〉と〈解放〉をテーマにし続けてきた石川が、恋愛と友情という二つの〈束縛〉の比重に照準を据えたのである。しかも、この時期の石川にとって、もはや〈束縛〉はネガティブなものではなくなっている。石川の内面化の至り着いた境地だといえよう。

第9章 同人「星座」への参加と第1回芥川賞受賞作品の誕生

——『蒼氓』——

石川達三は、昭和8年、9年には作品を発表していない。小林多喜二の受難など、社会運動に対する弾圧がもっとも激しかった時期である。その中で石川は、2年以上の充電期間を経て同人「星座」に参加した。これは、「新早稲田文学」からの分派ともいべき集団である。

『蒼氓』(第1部)は、昭和10年4月、同人雑誌「星座」創刊号に発表された。そして9月には、第1回芥川賞を受賞した。この作品は青木氏による新たな発掘作品ではない。ただし、芥川賞を受賞した「星座」版『蒼氓』と、昭和22年12月八雲書店から刊行された『石川達三選集』の『蒼氓』とでは、かなりの相違がある。たとえば、戦後版では「もうこれではつかまることはない。兵隊に行かなくて済むのだ。」の部分、戦前版では「もう決して掴まる事はない。彼は今始めて、自分が××(徴兵)を逃げてゐる事を知った。日本から逃げて行くのである事を知った。もう掴まる事はない。」になっている。

したがって、戦後版で読めば、ブラジル移民集団の姿を描いた作品(昭和恐慌による農村の疲弊)ということになり、戦前版で読めば、徴兵忌避、祖国逃亡のニュアンスが強いということになる。

しかし、いずれにしても石川のまなざしは社会批判、国家体制への反発には向いていない。その中で翻弄される卑小な存在である国民のほうにむいている。そのことが、「蒼氓」というタイトルに現れている。

第10章 初期石川達三(作家史)の再構築

——その振れ幅をめぐって——

石川達三の生長期には、高梁の菊楽屋での原体験などヒューマニズムへの傾斜がみられた。賀川豊彦『死線を越えて』の影響もある。批判精神(疑う目)を有するはずの石川が「社会派」に成りきれなかったのは(=人民を領導する社会運動家として立たなかったのは)、そのような個々の人間への慈しみや憐れみの心情がまさっていたからではないかと考えられる。そこに宿命論(日本的ゾライズム)も覆いかぶさってきたものと理解される。杉山栄(早稲田出身)、早稲田大学、同人「新早稲田文学」に接触しながらも最後までプロレタリア文学と距離を置き、「社会派」になりえなかったのは、そのような事情があるものとみられる。その振れ幅を生きた興味深い作家として、石川達三は再評価できる。このような石川の歩みは、一見すると〈転向〉や〈変節〉にも見えるが、幼少期からヒューマニズムに傾斜していた面があったり、言論統制の厳しくなる以前からプロレタリア文学に懐疑的で

ある面を見せていたりするので、そのような評価は当たらないだろう。石川の〈束縛〉〈解放〉論が内面化していったのは石川ひとりの問題ではなく、当時の文壇の一般的な風潮であったのかもしれないが、ゾラの影響を受けて閉塞感に苛まれブラジルへ渡航したり、大弾圧の時代である昭和 8 年、9 年に筆を執れなかつたりしたところに、石川の文筆にたいする真摯な姿勢も窺える。世情に迎合して軽々と〈変節〉できるような人物ではなかつたということだろう。

この学位論文で青木氏は、初期石川達三の作品を数多く発掘したことにより、未解明の部分を明らかにしたり、「社会派」の評価を大きく変更したりするなど、石川文学の再構築を行いつている。

資料編

付録として、新発見の石川作品が紹介されている。これは、「ミカド」「有終」という関西中学校の雑誌に掲載された石川自身の文章とその父祐助の事績を窺いうる文章、それに地方新聞「山陽新報」に発表された若き日の石川の小説である。いずれもなかなか一般の目には触れにくいもので、これを発掘した青木氏の功績は大である。また、この発見があつたからこそ、初期石川像を再構築しようという青木氏の博士学位論文の構想が生まれたともいえる。

青木氏が発見した新資料は、次の 12 点である。

資料1 『旅行記 屋島懐古』『短歌』

資料2 『短歌 小論』

資料3 「有終」(第一五号)

資料4 「有終」(第一六号)

資料5 「有終」(第一七号)

資料6 「有終」(第一九号)

資料7 「有終」(第二〇号)

資料8 『淋しかつたイエスの死』

資料9 『彼の出京』

資料10『放たれたる犬』

資料11『小品 春日』

資料12『昏暝』

関西中学校時代の資料の発見も重要だが、この中では、「抵抗」を鮮明に見せた『放たれたる犬』およびゾライズムの影響を窺わせる『昏暝』の発見がとくに重要である。もはや、この二作品なしには初期石川達三は語れないとさえ言える。青木氏の功績は長く後世に残ることだろう。

審査結果の要旨

1. 評価

先行研究では、石川達三自身が『蒼氓』を自らの出世作と呼んでいることもあって、それ(昭和10年)以前の研究がほとんど進んでいなかった。プロレタリア文学の思潮自体が離合集散を繰り返していたり、弾圧によって作家たちがどの程度本音を語っているのかが不透明であったりすることもあって、昭和ひとけたの研究は、これまで難しい領域だとされてきた。青木氏の研究は、そこに大いに寄与するものである。

本論文「石川達三研究 ―新資料の発見による再構築―」は、石川達三の思想や思考の曲折を丁寧にたどりつつ、昭和10年以前の近代文学史の一端をも明らかにしたものである。本論文の最大の特徴である新資料の発見は、そのことによく機能している。たとえば、青木信雄氏が新たに発掘した7本の作品(「ミカド」から2作品、「山陽新報」から5作品)のうち、「ミカド」所載の『旅行記 屋島懐古』『短歌 小論』は中学校5年生のときの貴重な文章の発掘であり、この時期の石川の文章が型にはまった古典的なものであることを確認しえたことによって、その後の杉山栄との出会いが石川に与えた影響の大きさがわかるのである。同様に、『放たれたる犬』の発見によって早稲田大学の入学による石川の変化を窺い知ることができたとし、『昏暝』の掘り起こしによって石川がゾラの影響を受けた時期も明瞭になったのである。

このように、本論文は初期の石川達三の歩みを明らかにしたにとどまらず、昭和10年以前の近代文学史をさらに厚く明瞭にしたという功績がある。本論文は旧著に数章を加筆し、章の配列も全面的に見直した労作で、芥川賞受賞作『蒼氓』に至る道筋の解明を企図した大著である。独創性に満ちており、秀逸な研究業績である。

具体的には、次のような点が特筆に値する。

- (1) 新資料の発見に安住することなく、初期の石川像の再構築を成し遂げた点。
- (2) 石川の折々の立場や当時の社会動向と石川作品の様相を有機的に関連づけて論じた点。
- (3) 単純な発展史観でも衰退史観でもなく、石川の振れ幅を丁寧に復元した点。
- (4) 従来の石川にたいする「社会派」「リアリスト」などという紋切り型の評価を根本的に見直した点。
- (5) 〈解放〉の内面化という屈折的な問題を明瞭に解き明かした点。

ここで述べられている個々の指摘について先行研究はほとんど存在せず、その独創性は際だっている。まさにパイオニア的な仕事を成し遂げたものである。石川達三の文筆活動を当時の社会状況や移民政策という俯瞰的視界の中で捉えられている点も、本論文の見識の高さを示している。

以上のように、形式面(分量)、章立て(論理構成)、論の独創性、完成度、いずれの点からみても本論文は申しぶんのない水準に達している。

2. 残された課題

本論文は優れた論文であるが、次のような残された課題もある。

- (1) 時代背景となっているプロレタリア文学についての説明は、もう少し厚みがほしいところである。
- (2) 国の移民政策の実態については、社会学的な知見をもっともう少し肉付けされたい。
- (3) 当時の若者に流行していた共同生活や新しい結婚形態など、社会風俗についてはさらに考察を加えられたい。
- (4) 杉山栄、昭和2年の「早稲田文学」の活動休止、ゾライズムの日本の変容など、要所要所でのさらに詳しい説明が欲しいところである。
- (5) 先行文献で目配りすべきものがまだある。各章末の注を充実されたい。

このような課題は残されているものの、本論文の水準や完成度の高さからすれば些細なものであり、これらによって本論文の価値を貶めるほどの瑕疵ではない。公刊までに修正されればよいものと考えらる。

3. 結 論

以上、本論文は、研究史上初めて石川達三の初期のありさまを具体的に明らかにしたものであり、緻密で実証的な考察により、これまで知られていなかった新たな石川像を数多く指摘した。独創的な研究でありながら、その方法はきわめて堅実であり、斯学の発展に寄与するところが大きい。よって、本論文の著者は博士(国際文化学)の学位を授与されるに十分に値すると認められる。

以上